

ささがも通信50

行徳野鳥観察舎友の会会報

1988年6月1日

特集

オオヨシキリ



市川 拓 画

「パパ、もうちょっと静かにしてよ！」

オオヨシキリ

田上 昇

俺たち鳥の仲間で、声と名が同じなのは、カッコウらしい。俺の名も本名より声から出た名前と呼ばれ、「俳句で行々子は本種である……」という文章が散見されるらしい。しかし俺の声は、三文字で表現されるようなものでない。

どんな声かって？5月の連休を利用して、河口や、湖など水辺の葦原に来てみる。たっぷり聞かせてやる。隣の縄張りにいるやつも、なかなか聞かせてくれるが……。連休がだめなら、夏休みの最初のころでもいいよ。ただ暑いから日除の帽子と、俺の好物の虫に刺されないようにな。

なに声を字にしてみろって。いくら字にしても、生の実感は出ないが、まあこんなものだ。ギョギョシ ギョギョシ ゲッ ゲッ ゲッ ツーカ ツカ ツカ スケス ケスケ ガイガイ……。なに？読んだだけでもうるさそうだって。夏の暑い日に聞かされたらうんざりするだろうって？そんなことはないよ。俺が鳴いている姿を知らないからだ。



オオヨシキリ

俺の体の色は、オリーブ褐色で、大きさは約18cm、スズメとムクドリの間ぐらいの体だ。俺を見たければ葦原に來いといったが、俺たちは葦原以外では生活できないのだ。だから俺の名前を漢字では大葦切・大葦切と書いているらしい。学名というむずかしい名前のarudinaceus (種小名) も、ラテン語の「葦」というそう。オオヨシキリならよいが、オオアシキリとなると、受験生には面白い名前かもしれないが、俺には関係ない。だけど足を切られるのは、だれでもいいやだ。

ところで、俺とよく似た体の色をした鳥が多くいる。センニュウとかヤブサメなどという名の鳥で、ヒタキ科ウグイス亜科の仲間である。ウグイスも同じ仲間、姿だけでは名前が判らず、声を聞かなければ判らないなどといわれている。

その点俺は、姿をかくすようなことはしない。姿をかくして鳴いているようでは俺の生活がなりたたないからだ。さきに5月の初め頃といったが、俺は、4月の下旬頃、南の国からこの葦原へ渡ってくる。そして後からくるはずのメスをむかえるための準備をはじめる。すなわち新居さがしである。

ここならと思う場所を見つけたら、さっそく、ここからここまでが俺の場所という縄を張らなければならない。縄張を知らせるために、俺は、枯葦の穂先につかまって、ギョギョシをはじめる。隣のやつと、縄張争いの闘いをすることもある。油断は禁物だから昼ばかりか夜もさえずる。メスが夜渡ってくるからで、24時間中、ほんの1時間しか休まない。そ

のため、うるさい鳥だといわれることもあるが、お許し願いたい。

そのかわりといえはなんだが、俺の特技をご披露する。

こうやって枯葦の穂先に両足でつかまっているだろう。このまま下へすべり降りるよ。どうだ。アッという間だろう。こんどは上昇、早すぎて判らないって。特技第2、体操の選手より上手に鉄棒の大車輪をやりながら、隣の茎へ移動。ギョギョシ……。

(観察していると、素早くすべりおりて、葦若葉に身を沈め、危険が去ると、スーとすべり上がってくる。)

あつメスが来た。では失礼、お元気で。またおあいしましょう。

それっきりオオヨシキリは、しゃべらなくなってしまいました。メスが渡ってきたからで、縄張の中でメスを追いかけすぐにつがいを形成し、巣づくりをはじめます。巣の形はコップ形で、葦の茎2〜5本の間に、枯葦の穂・茎・葉、チガヤの穂などを使って作られています。最近ビニールの紐などを利用した巣も見られます。卵は4〜6個ぐらい生み、主にメスが抱き、2週間ほどでかえります。

ナが巣立つのも、2週間のちといわれています。

メスが抱卵をはじめると、オスはまた例のギョギョシをはじめます。第2の妻をめとろうと、さえずるわけで、オオヨシキリは、一夫多妻の鳥としても知られています。

やあー。またお目にかかったね。暑くなったけど元気かい。卵の具合はどうか。そんなこと知らないよ。次のカアチャンをさがすのにいそがしくてね。ひどいって。それは人間がいうことさ。5

人？ものメスとつがった奴もいるよ。隣はまだ独身だけどね。俺たちだって厳しいのよ。

だいぶ羽がいたんでるって、そうだろう、葦原の中を飛びまわったからね。もうすぐ換羽するよ。その間はまた姿をけすよ。はえかわったら南の国へ旅をして、来年またくるのさ。子供達はカアチャンが育てているから大丈夫。どこに居たって、こんなに葦が繁っているは見えないだろうなあー。よく目をこらしていれば見えることもあるけれど、草いきれでがまんできなくなると思うよ。

ところで、俺たちの仲間を代表してお願いがあるの。棲み家の葦原が少なくなって困っているの。妙典もなくなったしこの保護区だって、セイタカアワダチソウがはびこって。俺あの草好きになれないの。昔は広い広い葦原がずーっとあって、どこまでいっても葦原、その先は空しか見えないといつて、こんな俳句がある。

行々子どこが葛西の行き留り

(小林一茶)

葦原をなくされると生きてゆけないのは、俺たちだけでないよ。この中にはいろいろな生き物が生活している。これ以上へらさないで、出来たら少しでもふやしてほしい。俺の子供達も来年は帰ってくるけど、生まれ故郷がなくなっていたなら、どんなに悲しむかれない。これ以上葦原をへらさないよう重ねてお願いしたい。ではお元気で。

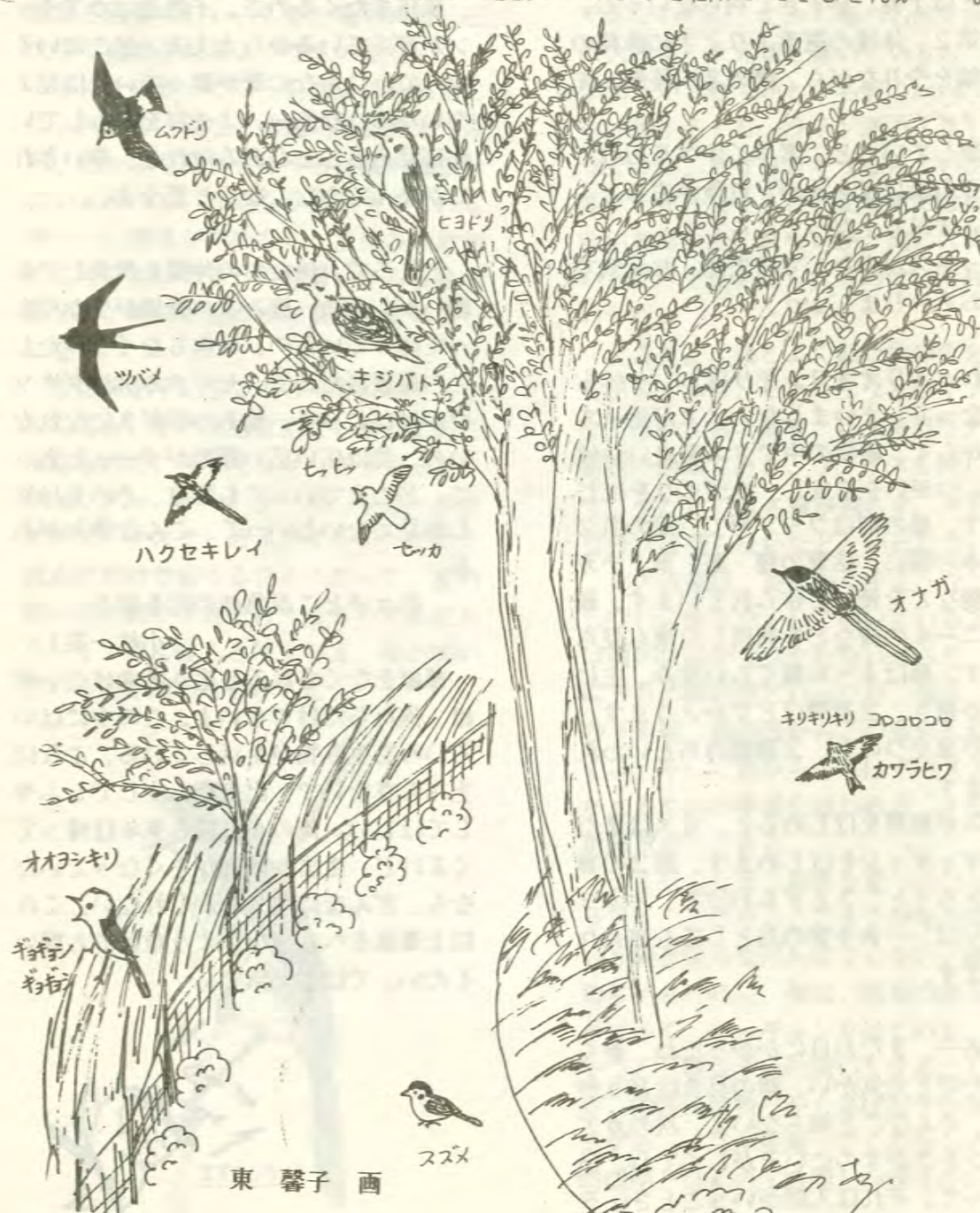


ニセアカシアの小道

耳を澄ましてみて下さい。ギョギョシ、ギョギョシ、……オオヨシキリが葦のてっぺんで大きな口をいっぱいにあけてさえずっています。ほら、あなたのすぐ目の前——

目を凝らして見て下さい。そうっと注意深く。緑の葦の根元にパンの親子が見え隠れしていませんか？ツバメがすいーと頭の上を滑っていきます。虫を捕らえて、始終おなかをすかせて騒いでいるヒナのところへ運んでいくところでしょうか？

ここはニセアカシアの小道——歩調をゆるめ、息をひそめると、大気中いっぱいにはちきれんばかりに溢れている、生命の躍動がひしひしと伝わってきますか——



東 馨子 画

はとお

新池でのセイタカシギの繁殖

東 良一

5月1日、毎月1度の底生生物調査で、新池の底泥を採取に行った私達は、下池の、2月に盛土をして作った通称「かなへび島」と「うらみ島」でセイタカシギの巣をそれぞれ1ヶずつ発見しました。

2週間ほど前からセイタカシギが数羽、新池に居着いていて、もしかしたら繁殖の可能性もあるかもしれないと聞いてはいたのですが、まさか本当に巣を作るとは！その日の夕方、卵が確認されセイタカシギの繁殖は確実なものとなりました。その後も巣は増え、5月25日現在で計10巣（但し3巣は卵消失）が確認されています。（P7水車ニュース参照）

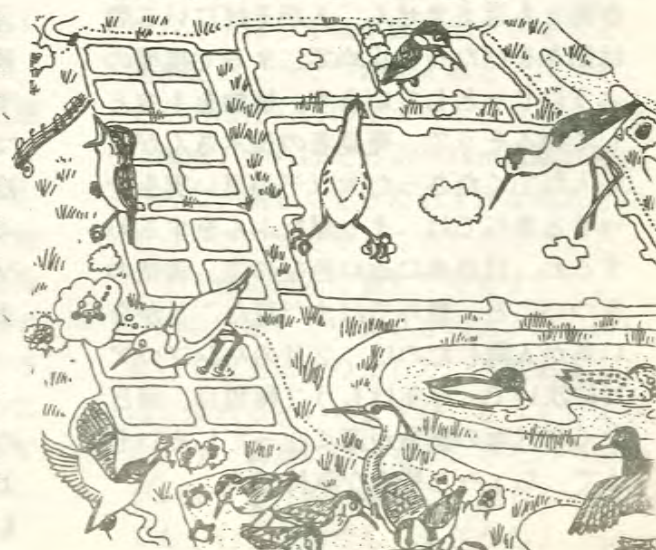
昨年の8月に、保護区内に2つの池を造成、今年の夏は水鳥を繁殖させたいというのが私達の願いでした。2月、3月に会員の手で、小さいながらも島を作ったのも少しでも繁殖に適した環境にしたいと考えたからです。しかし正直なところ、パンかコチドリが巣を作れば……というのが本音で、まさかセイタカシギがしかも集団で繁殖するとは夢にも思いませんでした。

セイタカシギの研究をしておられる市川学園の北川先生がほぼ毎日のように巣を観察され、情報をお寄せ下さいますが、調査も親鳥を脅かさないよう極力注意していただけるようお願いし、ヒナのバンディングなども今年は見合わせていただくことにしました。また、他の調査などでも繁殖地域への立ち入りはご遠慮願ひ、観察会でも観察路を素通りするだけで、立ち止まって巣を観察したりはしないようお願いしております。カラス、ヘビなどの外敵も少なくなく、すでに3つの巣で親鳥が何らかの理由で抱卵をやめてし

まったそうですが、巣が水につからないよう水位の調整に留意するなど、できるだけのことをして、1羽でも多くのヒナが巣立てるよう、この日本初のセイタカシギのコロニー（集団繁殖地）を見守っていきたくて考えています。

乾燥化の進んだ保護区内に人工的に湿地を作り、水鳥の繁殖に適した環境を作るという実験の目的はこうして実証されたわけですが、喜んでばかりはいられません。むしろ、こんな小さな湿地さえも、この周辺には残っていなかったのかと改めてショックを受けたのも事実です。

今年の末にはトヨタ財団の研究コンソールの結果が発表になり、もし最優秀賞を受賞することができれば、今後も助成を受けられることになります。保護区内に更にいくつかの池が造れるかも知れません。水源確保、植生のコントロールなど課題は山積していますが、かつて水鳥の楽園と言われた「新浜（しんはま）」の面影を少しでも取り戻し、本当の湿地保護区を造ることは、もはや、ただの夢ではなくなってきているのです。



トミタ イチロー 画

鳥の国から 蓮尾純子

私はずっと前からヒレンジャクとヘラシギとミヤマホオジロが見だくてたまりませんでした。まだ私のライフリストに入っていないし、どれも特徴がはっきりしているので、ああだこうだと悩んだり、図鑑をいくつも調べたりせずに、ひと目見ればぱっとわかるはずの鳥だからです。その鳥だけわざわざ見に行くのはいやなので、どこかへ出かけた時にふっと目の前に出てきてくれるか、観察舎から見える位置でじっくり見るというような出会いを期待していました。ついですがどの種類もわが家から半径 1 km 以内で記録されています。ミヤマホオジロなどは、100m先の苗圃に出現し、半日近くいてくれたのに、私が見たのは飛び去って行くしっばだけでした。

野鳥病院にヒレンジャク君が入ったのは5月5日のことです。何でも、習志野で5月初めに20羽近くのヒレンジャクがやって来て、ヤツデの実をさかんに食べていたとのことで、そのうち1羽が猫に襲われて入院しました。あこがれていた通りのきれいな鳥で、尾羽の先の紅色が何とも言えません。人がそばにいる間は動きをびたっと止めて、まるで模型のようにじっとしています。植物を主食としているようで、発見者の茂木さんが差し入れてくださったヤツデの黒い実をせっせと食べては、まっ黒なふんをするわするわ。目が赤に近い色なので、表情のきついこと。野外ではまだ見たことがない鳥が入院したのは、2月のハシジロアビに次いで、今年はもう2種類目。何となく初対面の感動が薄くなってしまいそうで、ちょっと残念な気持です。

残るはヘラシギ。どの本を見ても、くちばしの先にティースプーンをくっつけたようなかわいくてユーモラスな姿で、おまけに世界的に見ても数の少ない種類です。外国からみえた鳥にくわしい方がぜひ見たいと言われるのは必ずと言ってよいほどヘラシギとトモエガモなのですが、どちらもいつでもいるような種類ではありません。

4月27日、待望のヘラシギが1羽見つかったとのこと。大喜びしたのはいいのですが、それからというもの、トウネンとヘラシギを見分けるのがひと騒ぎというか、ひともんちゃくというか、わけがわからなくなってしまいました。私はたかだか150mしか離れていないウラギク湿地にいるシギが、普通使っている25倍の望遠鏡ですっきり見分けられないわけがないと思うのですが、時にはヘラシギなのか、くちばしに泥をつけたトウネンなのか、40倍のレンズを使ってさえ意見がわかれることがあるのです。もう、ヘラシギなんか、きらいだ！ 私のライフリストにはまだヘラシギを入れることはできそうもありません。

セイタカシギのコロニー（コロニーと言える状態はたぶん日本初）のせいで、他の鳥がちょっとかすんでしまいそうですが、夕方になるとキョウジョシギやハマシギなどが結構入ってきて、春の渡りはまあまあでした。それにしても、小学4年の国語の教科書に登場しているオオソリハシギは、今年もほとんど見られませんでした。

トベラ、スイカズラ、ノイバラと初夏の花がせいぞろい。うっとりするようなよい香りです。センダンやシャリンバイもきれい。ヤマモモも実をつけました。

水車ニュース 二度あることは…？

保護区の新しい池（名前はまだありません）は、丸浜川の水をじかに入れている上池と、くねくねした水路で上池につながる下池の2つがなっています。下池は約20cmほど上池より低く、やや深めの水位。上池は松や桜を掘り残して島にしてあるほか、水はごく浅い状態（40cm前後の深みを別にすれば2~25cm程度）に保っています。

下池には水面に出る島がないので、2月にみんなで島づくりをしました。鳥の休み場になり、運がよければ巣作りにも利用されると思ったからです。スコップで重たい泥をえっさえっさと積み上げながら、「もしかして、セイタカシギが巣を作るかも知れないね。」「まず無理とは思いますが、そうなりそうですね。」と話していました。「万が一、巣を作ってくれたら、あぜ道みたいに細長くしておけば両端に1つずつ、2つがい作るかも知れないね。」そこでひょろ長い“かなへび島”ができました。

何と本当にセイタカシギが営巣開始！ 机くらいしかない“うらみ島”に1つ、“かなへび島”に2つ？！そして上池の中に3つ、連絡水路の近くに2つ。合計8巣、36卵（1巣は4卵なのですが1つの巣では雌どうしがペアを作り、8卵が産んであるとのことです；北川珠樹先生のお話）。周囲の土手を含めてもわずか100m四方の場所に8つも巣があるので、日本初のセイタカシギのコロニーと言ってよいはず。話がうまくできすぎていて、信じられないくらいです。

下池の水は、太いホースを利用して、サイフォンの原理で外に流しています。古い水路を生かし、観察路の下はダクトを通してくぐらせ、乾燥が進んだセイタカアワダチソウの草原をうるおしながら地表を伝ってじわじわとウラギク湿地にたどりつくというわけです。

これにはいくつもの利点があります。まず、必要に応じた水位の調節が可能になります。（5cm径のホース1本で1日50~100トン前後の排水が可能。現在は3本のホースを使っており、ストックが3本あります）。次に、池全体に水の動きをつけることができます。更に、ウラギク湿地周辺の乾燥した草原を湿原にもどすことや、干潟を汽水状態に近づけることも多少は期待できるでしょう。

サイフォンによる小さな流れができた時、「もしかして、シラスウナギ（ウナギのこども）が海から上ってくるかも知れないね。」「まさかねえ。」と話していました。ところが、いたのです。シラスウナギが。下池の水位を少し下げるとして掘っていたところ、水たまりの中で何かがニョロッと動きました。ミミズやムカデにしては水面に出てきません。泥水をさぐってつかまえると、10cmそこそこのほんもののウナギ！ウラギク湿地（海水）からはたっぷり50mは離れているのに、新しくできたわずかな流れをたどってここまでやってきたのです。さっそく下池に運んで放してやりました。

「もしかして…まさかねえ」が2回も続けて現実になりました。二度あることは三度あるといいますが、どうでしょうか。今、新池にはオカヨシガモのつがいがありますが、もしかして、巣でも……でも、いくら何でも、まさかねえ。

水鳥カウントデータ

調査日 1988年4月29日

種名	新浜 保護区	新浜鴨場	行徳海岸	江戸川 放水路	原木
出現個体数					
カイツブリ		1			1
カワウ	117	14			
ゴイサギ	3	63±			
ダイサギ	1	5	5		
コサギ	6	50±	1	5	2
アオサギ	1				
カルガモ	16	12	2	3	3
コガモ	343±	55±			4
ヨシガモ	3				
オカヨシガモ		10			
ヒドリガモ	234				
ハシビロガモ	110±	2			
ホシハジロ	4	2			
キンクロハジロ	76	11			
スズガモ	144	1	1	33	
チュウビ		1			
キジ	3	3			
バン		2			1
コチドリ	7	3	1	1	9
シロチドリ	22		41	58	
メダイチドリ	10		30	74	
ダイゼン	3		50	2	
大型チドリSP			50±		
キョウジヨシギ	37		30	37	
トウネン	2				
ハマシギ	214		540±	125	
オオハシギ	1				
ツルシギ		2			1
アオアシギ		1			
キアシギ			6	3	
イソシギ	4				
ソリハシギ	3				
ホウロクシギ	1			1	
チュウシャクシギ				7	4

保護区	鴨場	行徳 海岸	江戸川 放水路	原木
中型シギSP		500±		
トリカモメ	9	27	18	
セグロカモメ	4	1		
アジサシ		2500±		
コアジサシ	19	126±	6	
キジバト	16	23	2	2
ヒバリ	2		7	3
ツバメ	15	27	4	
イワツバメ				20±
ハクセキレイ	12	1	1	3
ヒヨドリ		5		3
モズ	1	1		
アカハラ	2			
シロハラ		1		
ツグミ	13	3	27	1
大型ツグミSP	1	1		
ウグイス		1		
セッカ	7			
アオジ	5	3		
カラビロ	4		1	4
スズメ	32	14	35+	28±
ムクドリ	10	6	30+	47±
オナガ	1	5		1
ハシボソガラス	2		1	4
ハシブトガラス	1			1
ドバト	37	8		
総個体数	1576±	344±	3913±	385+
出現種数	48	33	19	22

調査者：赤田秀子・藤和、東良一、川上秀明、白石隆徳、田上昇、谷神明、長尾順子、
新妻達夫、遠尾高彰
注：行徳海岸の調査日は5月1日



ゴミ箱のなげき

田中 元

“とってよいのは 写真だけ

残してよいのは 足あとだけ”

観察舎のパンフレットにあるこの言葉は、なんともいえず優しさと、深い味があります。そして、私が担当する県民の森でも、案内板に使わせて頂いております。

ところで、良い言葉と現実では、なかなか一致するものではなく、ゴミの扱いについては、頭を痛めることが多々あります。

この連休は、天気恵まれ、県民の森には大勢の方々が訪れ、足あととゴミの山が残されました。従来ゴミ清掃は休日の翌日行なっていたのですが、休みが続くと、処理能力を越えてしまい、ゴミがゴミを呼ぶ結果となった訳です。

どなたでも、ゴミのない環境を快適と思われるはずなのに、なぜ、現実とは異なるのでしょうか。

ゴミ持ち帰りを徹底するために、ゴミ箱の撤去も考えておりますが、なにかよい案がありましたら教えて頂けませんか。

県民の森に来て良かった、そのような環境づくりをしたいのです。

今年もやります

クリーン丸浜川

くわしくは次号で

昨年実施して好評だった“クリーン丸浜川”まつりを今年も行なう予定です。

ゴミ拾い大会・スイカ割り・バーベキュー・花火など……7月30日(土)

丸浜川と新池の見学・視察会……7月31日(日) 予定

どうぞ次号のすがすがしき通信をお楽しみに。

新入会員

住所・地番変更



さえずり

セイタカシギ集団繁殖

田久保晴孝

5/8、風が冷たかったが晴天にめぐまれて、たくさんの野鳥と鳥み人にあうことができた。鳥合わせでは、セイタカシギをはじめ52種+番外(ドバト、アヒル)をみることができた。

放水路では、ハマシギの群れ、胸の赤いメダイチドリ、白黒のダイゼン、長い口ばしのホウロクシギ、チュウシャクシギ、……たくさんのシギ・チドリが観察できた。また昼食時には、アジサシとコアジサシが並んでダイビングしているのが見られ両種の比較がよくできた。

しかし、妙典はほとんどが埋め立てられて、白茶けた残土の肌をみせ、かつての生物豊かな湿地帯のおもかげもなく、とても悲しい気分になった。

保護区では、セイタカシギが12羽みられた。エビガニ?を苦労して食べる姿(足が長くスマートな姿)もみられて、皆その優雅さに感激していた。



4月10日新浜探鳥会に参加して

中野 初恵

2月に野鳥の会に入って、2度目の探鳥会。冬のカモ類や市街地の小鳥しか見たことがなかった私にとってシギ・チドリたちはどれも目新しかった。特にスマートな体に不釣り合いな程長い足のセイタカシギや、赤茶色の胸が目立つメダイチドリは印象に残った。

探鳥会の始めにリーダーが行徳駅前で「以前このあたり一帯は湿地や干潟でした。」と話された。どんなにかたくさんの鳥たちが暮らしていたのだろう。将来これ以上自然が失われ、私がこの日会った鳥たちが、「昔はこんな鳥がいたのです。」と言われることがないように微力ながらも努めたい。



昨年、友の会で造った淡水池では、6巣(内4巣に卵とのこと)ものセイタカシギの巣が観察され、この小さな池が日本一の集団繁殖地(?)となった。

あまりにも予想どおり(期待どおり)になったので友の会でも感激ひとしおでした。しかし逆にいえば、この程度の湿地がこの地域にないということで、もっともこの種の淡水池が必要であろう。

昭和62年度決算報告

自 昭和62年 1月 1日
至 62年12月31日

収入の部		
項目	金額	備考
繰越金	413,973.-	
会費	200,500.-	
寄付金	51,350.-	
雑収入	3,600.-	
利子	16,929.-	
計	686,352.-	

支出の部		
項目	金額	備考
編集費	7,420.-	
印刷費	86,600.-	
発送費	82,200.-	
事務費	24,360.-	コンピューター関係費他
行事費	6,900.-	
計	207,480.-	
63年度繰越	478,872.-	

会費内訳	賛助	26名
	普通	123名
	ジュニア	38名

繰越金内訳	現金及び振替	11,495.-
	普通貯金	175,644.-
	定額貯金	291,733.-

利子内訳	普通貯金	1,623.-
	定額貯金	10万 → 6,076.-
		13万 → 9,230.-

行事案内

誰でも自由に参加できます。参加費無料。

☆定例新浜観察会(毎月第2日曜日) 6月12日、7月10日

集合: 東西線行徳駅前 午前10時

解散: 行徳野鳥観察舎 午後3時頃

担当: 東 良一 共催: 日本野鳥の会東京支部、千葉県野鳥の会
持物: 昼食、飲み物、バス代(大人290円、子供150円)、帽子

行徳駅からバスで行徳橋南詰へ、そこから水鳥を観察しながら土手沿いに歩いて河口へ向かいます。河口付近で昼食後、午後は又バスで保護区へ。カルガモやバンの子連れが見られるとよいですね。1年中では一番見られる鳥の種類が少ない季節ですが、これを機会に鳥を覚えるのには向いているかもしれません。小雨決行。



☆定例園内観察会(毎月第1・3日曜日) 6月5日・19日、7月3日・17日

集合: 行徳野鳥観察舎前 6月; 午後1時半 7月; 午後3時

解散: " 6月; 午後3時半頃 7月; 午後5時頃

担当: 観察舎 蓮尾、協賛 友の会

普段は立ち入り禁止の保護区内を歩いてひとまわりします。葦原ではオオヨシキリが声高く歌い、頭の上をセッカがヒッ、ヒッと鳴きながら越えていきます。新池ではセイタカシギなどが子育て中、そうっと通り過ぎましょう。夏場は集合時間が変わりますのでご注意ください。雨天中止。



☆夕暮れ観察会

6月26日(日)、7月24日(日)

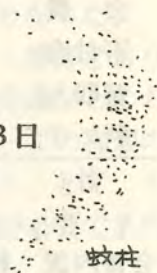
集合：行徳野鳥観察舎 午後5時
解散： " 午後7時頃
担当：観察舎 蓮尾



夕風が快い季節になりました。ネグラヘむかうムクドリやツバメ、サギなどを観察しながら、保護区をひとまわります。虫刺され予防のため、長袖・長ズボンでおいで下さい。雨天中止。

☆丸浜バードリバーを調べよう(毎月第1日曜日) 6月5日、7月3日

集合：行徳野鳥観察舎 午前10時
解散： " 午後3時頃
担当：東 良一
持物：長ぐつ、タオル、ビニール手袋



丸浜川と新池の底泥を採取し、中にいる生物を探します。丸浜川も息をふきかえし、新池ではセイタカシギが巣を作るなど、実験の成果は目を見張るほどです。午後からは1Fの視聴覚室でソーティングの作業をしています。見学も自由ですので是非お立ち寄り下さい。小雨決行。



編集後記

新池のセイタカシギコロニーには、うれしいやら心配やら……。同じ子育て中の身としては、あまり騒ぎ立てずそっとしておいてやりたいと思うのですが……。この号の発送時に、無事にヒナがかえっていますように。今日(5月21日)、2巣の卵がなくなっているという気がかりなニュース。他の6巣では親鳥がしっかり抱卵中。最初のヒナがかえる予定日まであと1週間足らず。がんばれ、がんばれ。

うらぎく湿地でアマガエルが鳴いていました。ヒクイナが行徳高校付近で、タマシギが金魚池付近で、別々に記録されました。今日は色々なことがある日です。(純)

すがも通信 No. 50

1988年6月1日発行

発行所 行徳野鳥観察舎友の会

年会費 一般1000円、ジュニア500円

発行人 東 良一

事務局

編集 蓮尾純子、東 馨子

行徳野鳥観察舎

